

## 平和のうた

県立那覇高等学校 三年  
呉屋 鳳輝

朝七時

まぶしい朝の光を背中に受け  
颯爽と自転車に乗る  
ゆるやかな初夏の風が僕を横切り  
追い抜いては追い越され  
舗装されたアスファルトの坂道に  
チェーンの音がシャーッと響く  
カバンの中には教科書と弁当  
水筒の水が時折カランとリズムをとる  
「行つてらっしゃい」と手を振る母の姿はもう見えない  
今日もまた新しい一日が始まる

七十年前

まぶしい朝の光の中で  
母親は我が子を戦場へと送り出す  
生きて帰ってくることを信じ  
生きて待つていることを誓い  
母親は我が子を送り出す  
彼の行く先に  
鉄の暴風が吹きつけることを知りながら  
我が子の無事を  
ただひたすらに祈る母親は  
どんな思いで  
無念の涙を飲み込んだであろうか

七十年前

激しい戦火の飛び散る中で  
少年は母を思う  
人間の血で赤く染まる海を背景に  
射撃の炎で焼けただれた地を進み  
何かを守るために  
何かを殺す  
戦場と化したかつての美しい島で  
母親の無事を一途に祈る少年は  
どんな思いで銃を握り  
引き金を引いたであろうか

時は移りゆくとも

七十年前と変わらぬ風が駆け抜ける  
人々の生命を奪った激戦の大地は  
いつしか緑で覆われ  
人々の生命を飲み込んだ真つ赤な海には  
いつしか珊瑚が蘇る

いつの時代にも人間は弱い

誰だって弱い

弱くていいんだ

弱いから誰かと手をつなぐ

そのつないだ手に熱く脈打つ血潮が  
やさしさと強さと  
守ることの大切さを教えてくれる  
その手の温かさが  
武器を持たぬ人間に  
心の正しさを教えてくれる

今もなお大地に眠る遺骨の叫びに  
今もなお海の底に眠る魂の叫びに  
僕はいま

平和のうたを捧げよう  
空よ聞け 海よ聞け  
風よ聞け 大地よ聞け  
本当の強さは何かを守ること  
本当の勇氣は手を差し伸べること  
そう つないだ手のぬくもりは  
いつだって 温かい

ねえ 母さん

僕は覚えている  
幼き日に手をつないで走り回ったことも  
転んだ僕を  
やさしく抱き起こしてくれたことも  
僕の心には  
いつだって平和のうたが聴こえている

朝七時

まぶしい朝の光は  
自転車にまたがる僕の背中をおす  
時に冷たい雨を運び  
時に灼熱の太陽を運び  
やがて夏がやってくる  
焼けつくアスファルトの坂道に  
チェーンの音がシャーッと響く  
少し多めに入れた水筒の水が  
カラン音を立てる  
一つ目の曲がり角  
振り向くと手を振る母の口がもう一度  
「行つてらっしゃい」と動く  
僕は片手を挙げ  
「行つてきます」と心の中でつぶやく

平和のうたは

いつだって心の中にある  
今日もまた新しい一日が始まる